九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

壱岐のアクセント

添田，建治郎
山口大学人文学部助教授

https://doi.org/10.15017/10441

出版情報：文獻探究. 18, pp.1-6, 1986-09-18. 文献探究の会
バージョン：
権利関係：

壱岐のアクセント

添田建治郎

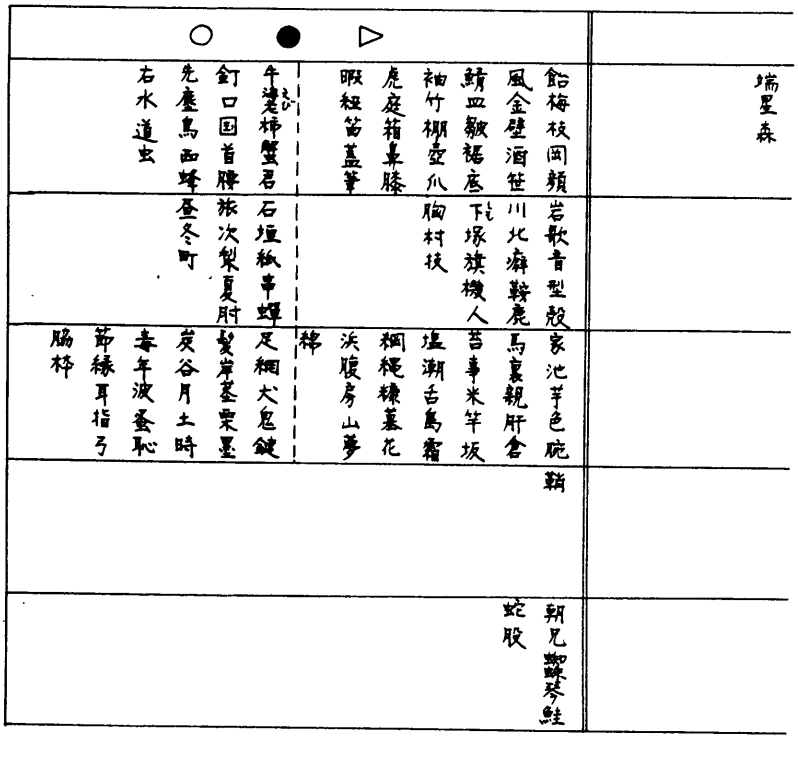
壱岐アクセントの臨地調査は、二拍名詞を対象として昭和61年3～6月に行った。その際、調査語彙（二拍名詞＋「が」）とカードに一例ずつ記し、それをゆっくり丁寧にお読みいただく「読む調査」法をとった。今回の報告は、その壱岐アクセントの具体的な実態の一端をまとめたものである。(1)

一　長崎県壱岐郡のアクセントの実態

壱岐郡四町の中の芦辺・石田・郷ノ浦、以上三町の大部分を占める地域での二拍名詞のアクセントは、「壱岐主流式」として概ね左のごとき姿に行われている。古態を残すと目される、芦辺町箱崎中山触の石橋好衛氏（78歳）の場合を例示してみる。(2)

表1　石橋好衛（78歳　芦辺町箱崎中山触）

多・少／類	第一類	第二類	第三類	第四類	第五類
▷	鷹	悪戯（ばが）門鶯	牙草	汗栗息板糸	藍青赤秋雨
○		皆金		稲臼海瓜笠	蛤（はま）蕪（かぶら）陰茶
●	蟻雄傷桐霧			数肩角鎌耕	杵合錘屑管
	杉鉛滝釣軒	鯵（あじ）桃（ぐい）嵐弦虹	御鮨鉢閘	鯉声痩白縦	篝露鶴鍋春
	橋雪			今朝（けさ）汁筋陽側	剣前恵眉画（まゆ）
				空種罪秋中智	
				苗（なえ）鑿箸肌針	
				舟紅松晴麦	
				藁	



多・少／類	第一類	第二類	第三類	第四類	第五類
▷	端星森	飴梅枝岡頬	岩歌音型殻	家池芋色腕	鞘
○		風金壁酒笹	川化麻鞍鹿	馬裏親肝倉	
●		鯖皿皺裾底	下塚旗機人	苔事米竿坂	
		袖竹棚壺爪	胸村扶	塩潮舌鳥霜	
		虎庭箱鼻膝		梱縄糠墓花	
		暇紐笛蓋筆		浜腹房山夢	
		牛海老（えび）柿蟹君	石垣紙串蟬	足細犬息鍵	
		釘口国首膵	旅次梨夏肘	髪岸茎栗墨	
		先鹿鳥西蜂	昼冬町	炭谷月土時	
		右水道虫		毒年波蚤恥	
				節縁耳指弓	
				脇杵	

多・少／類	第一類	第二類	第三類	第四類	第五類
▷				朝尼蜘蛛琴鮭	
○				蛇股	
●					

これら三町を中心に広く行われている壱岐主流式アクセントの現状は、

多・少	一・二・三類	四・五類
多	○●▽	●○▽
少		

の体系をもち、筑前アクセントの一分派であって、福岡市西部域、糸島・宗像・遠賀郡あたりの「筑前式」(3)

にきわめて近いものだと考える。全体的に、第一、二類語を中心として、第二拍目に狭母音を有する語に幾分が●○▽例が多いようではある。当該地方のアクセントのかつての姿と

一・二類	三類	四・五類
●●▽	○●▽	●○▽

ではなかったかと推定する所以である。しかし、第一、二類語ではやはり○●▽が大勢を占め、第三類語にまで●○▽例があるなどして、現状を解して「博多式」のような

三類	一・二類	四・五類
	広	狭
○●▽	●○▽	と

とはみなしがたいのではないか。

一方で、同じ芦辺町内でも、住吉前触の生え抜き末永義次氏(81歳)の二拍名詞アクセントは異質で、壱岐主流式とは違った変化の要因が働いて、新たに第一、二、三類の特定の語に○●▽↓●○▽の変化が起きていると考えたい。

表2　末永義次(81歳　芦辺町住吉前触)

拍数 / 類	第一類	第二類	第三類	第四類	第五類
▷				汗栗息板糸	藍青赤秋雨
	岡鷹鹿笛	悪蟹門鹿下	牙霜	稲白海瓜笠	鮎芦牡蠣陰桑
		塚妻皆		数肩角鎌絹	鯉声猿白縦
				杵舎錐眉管	晏蟹鶴鍋春
				今朝汁筋陽側	鮒前忘眉繭
				空種罪枝中智	
				面鑿著肌針	
○	蛾牛柳雄傷	杭軍笊旅弦	足岸墓柳鮒	弁紅松味噌麦	
	君桐霧口勝梨貝虹繪町		時毒牛恥鉢	蕎	
●	先湾釣西軒雪		緑肌秤		
	端蜂星右道				

	飴梅枝顔風	岩歌音型殻	家池羊色腕	鞘
	金壁酒笹鯖	川北癖鞍蔦	馬裏親肝草	
	皿皺裾底袖	旗機人胸村	倉苔事米竿	
	竹棚壺爪庭	八重枝	坂塩潮舌島	
	箱鼻膝暇紐		綱縄糠墓花	
	蓋筆		浜腹房山夢	
▷			綿	
●	蟹釘国首	琴石煙紙蟬	網犬皂鍵髪	
	杉鈴鹿鳥水	次肘昼冬	栗墨炭谷月	
○	蛇森		土波蚤節耳	朝兄蜘蛛琴蛙
			間指弓	蛇股

末永氏のアクセントは

一・二・三類		四・五類
下北以外	無狭母音+狭	
○●▽	●○▽	

の体系をとり、第二拍目に「無声子音+狭母音」拍を有する語の大多数が軒並み頭高型化(○●▽↓●○▽)するのが、その第一、二、三類語の共通した特徴である。試みに、表2における右該当例を○印で囲んで特定してみた。「住吉式」と呼称して区別する。

壱岐郡の西北部地方には、

三類	一・二・四・五類
○●▽	●○▽

の「勝本式」アクセントが存する。いま、郷ノ浦町長峰東触の藤尾コナミ氏(76歳)を例にとって示すが、勝本町勝本浦の川村利平氏(81歳)もこれに同じ。

表3　藤尾コナミ(76歳　郷ノ浦町長峰東触)

語類／アクセントの型	第一類	第二類	第三類	第四類	第五類
▽	梅枝岡顔風 壁笹鯖皿皺 裾底袖鷹竹 棚壺爪虎庭 箱皐膝暇紐 笛蓋筆	悪愚岩歌音 型門殻川北 斜鹿下塚蔦 妻旗機人皆 胸村童	牙竿霜	汗栗息板系 稲臼海糸笠 数肩角鎌稍 杵含錐肩管 今朝汁筋隅側 空種累枕中	藍青赤秋兄 雨鮎夢蘭陰 桑鯉声猿白 縦袋寝鶴鍋 春鮒蛇前怠 眉繭聟股
○ ●	蟻牛達柿蟹 雑傷君桐霧 釘口首膝先 杉鈴滝塵釣 鳥西軒端蜂 星右水道虫 森	鯵石垣紙祝 串芯旅次弦 梨夏虹楊肘 昼冬町雷	鮨谷月闇	苗鑿箸肌針 舟紅松嚆麦 藁	
▷	飴金酒	鞍枝	家池芋色腕	鞘	朝蝶琴鮭
●			馬哀親肝草 倉苔事米坂 塩潮舌島綱 紐線葱花浜 腹房山夢綿		
○	国	蟬	足細犬息鍵 髪岸茎櫛栗 墨炭土時毒 年波蚤恥鉢 節緑耳弓指 肋枠		

勝本式アクセントは、勝本町だけでなく郷ノ浦町北部までの分布域

をもつのである。

壱岐アクセントの具体的な姿と以上のように概観する。壱岐主流式と勝本式は、

一・二類	三類	四・五類
●●▽	○●▽	●○▽

と共通の祖形とする兄弟の関係、住吉式は壱岐主流式からの新たな派生。壱岐アクセントの現状には一・二類／三類の体系はないかもしれない。それに、壱岐全体の傾向として、○●▽の発音に際して第二拍目の高音部を半拍分ほど長呼する話者が老年層に少なからずあったが、同様の傾向は、九州本土の筑前域にも見出される。

二　異なるアクセント体系の衝突

まずは、狭い壱岐の中での、前項にあげたごとき体系の異なったアクセントが隣接するような地帯に起きたアクセント変化の現象について、その一、二を報告しておきたいと思う。

それは、前述の郷ノ浦町長峰東触という同一地点で世代間のアクセントに差が生じてきており、若い層のアクセントが異なった姿を呈するに至った原因の究明に関わるものである。先に掲げた表3は、長峰東触生と抜きの老年層藤尾コナミ氏の二拍名詞アクセントであった。その姿が、同じ長峰東触でも表4の比較的若い竹尾泉氏（49歳）になると、いささか様相を変じてくる。第四、五類は依然として●○▽ととって老年層からの変化がないゆえ省略し、第一、二、三類の内訳だけを示す。若い竹尾氏の場合に特徴的なのは、本来●○▽ととっていたはずの第一、第二の両類に、老年層の藤尾氏には殆どみることのなかった○●▽の例が、それぞれ「飴金酒虎暇、国先軒右水森」//語、「歌殻川鞍下塚蔦人村枝、垣車蟬冬」14語について、顔を出してくることである。第一、二類のアクセントに、何故

表4　竹尾泉（44歳　郷ノ浦町長崎東触）

語類／ミラビの型	第一類	第二類	第三類
▷	梅枝岡頬風壁笹鯖皿	恋裏岳岩音型門北癖鹿	牙霜
○	皺裾底袖鷹竹棚壺爪	妻旗機皆胸八重	
●	庭箱鼻膝紐笛蓋筆		
▷	蛾牛蓬柿盤雉傷君桐	蟀石紙桔笊旅次弦梨鮨	
○	霧釘口首膕杉鈴滝蘆	夏虹橋肘昼町雪	
●	釣鳥西端蜂星道虫		
▷	鉛金酒虎暇	歌殻川鞍下塚蔦人村	家池芋色腕馬裏親肝
○		技	草倉苔亭米竿坂塩潮
●	国先軒右水森	垣串蟬冬	舌島綱縄糠墓花浜腹
▷			彦山夢綿
○			足網犬息鍵髪岸墓御
●			栗墨炭谷月土時毒年
▷			波蚕恥鉢節縁耳闇弓
○			指脇枠

このような無視できない世代差が生まれてくるのであろうか。もともと、長崎東触のアクセントでは、第四、五類も第一、二類と統合して等しく●○▽に行われていた。ところが、もっかの尾高型化●○▽→○●▽の現象は、その第四、五類には全くあらわれてこず、第一、第二の両類所属語にだけ著しいのである。しかも、尾高型化した右掲〃、〃語の中には、アクセント変化をもたらしうるような特定の音声環境の偏りを指摘できないのである。これらの傾向は、第一、二類における●○▽→○●▽化の現象が、普遍的な「音韻変化」によってもたらされたものではなく、隣地の異なる体系のアクセントとの接触をくり返しつつ、そこの当該の○●▽を個別的に習得した、つまり、「形態変化に類するアクセント変化」の結果だと考えさせる。本来勝本式をとっていたはずの郷ノ浦町の北部長崎東触のアクセントが、これに隣接した、例えば、第一、二、三類が○●▽で統合しているような郷ノ浦町中心部あたりの優勢なアクセントと衝突して、それがために、長崎東側の比較的若い世代に属する竹尾氏などの、しかも第一、二類にだけ○●▽の増加があらわれてきたと解釈するのである。竹尾氏の第一類には○、●、▼例が皆無ゆえ、東京共通語アクセントからの影響という点はなさそうである。

それではいま、第一、二類語での○●▽習得の事実を裏付けるような、具体的な内部徴証を見出しうるであろうか。表3に示した長崎東触生え抜きの老年層のアクセントと、左掲表5のごとき壱岐主流式アクセント[4]（末永絹枝氏（44歳　郷ノ浦町渡良西触））との接触があった場合を想定して比較してみる。

表5　末永絹枝（44歳　郷ノ浦町渡良西触）

語類／ミラビの型	第一類	第二類	第三類
▷	鉛梅枝岡頬風金壁酒	岩歌音型殻川北癖鞍	家池芋色腕馬裏親肝
○	蛾牛雉傷君桐霧鈴釣	恋裏岳門妻皆	牙霜
●	蜂	桔串笊弦梨虹	
▷	笹鯖皿皺裾底袖鷹竹	鹿下塚蔦旗機人胸村	草倉苔亭米竿坂塩潮
○	棚壺爪虎庭箱鼻膝暇		舌島綱縄糠墓花浜腹
●	八重技		

●	紐笛蓋筆	
○	蔓柿蟹釘口囮首膝先	鯵石垣紙蟬旅次夏橋
	杉滝慶鳥西軒端星右	肘昼冬町雷
	水道虫森	

房山夢綿	足網犬鬼鍵髪岸茎梛
	栗鮨墨炭谷月土時毒
	年波蚤恥鉢節縁耳闇
	弓指脇梓

長峰東触での比較的若い竹尾氏（表4）のアクセントを検するに、「飴金酒虎暇、囮先軒右水森」「歌殻川鞍下塚蔦人村技、垣車蟬冬」は、●○▽が本来の第一、二類語の中で例外的に○●▽に行われている語である。いま、それら諸語のすべてが、表5に示した壱岐主流式アクセントでも○●▽ととって対応することに注目すべきである。また表4の竹尾氏では、第三類語「竿谷月闇」も○●▽に発音されるようになったが、それら4語も壱岐主流式アクセントでは○●▽をとっている。これらの符合は、「長峰東触の若い世代にみられるアクセントの変異は、壱岐主流式アクセントとの接触によって新たに成立したものだ」とみなす立場にとって、きわめて好都合だと思われる。これとは逆の、「もともとの長峰東触のアクセントを壱岐主流式と考え、若い世代での新しい姿は勝本式からの影響を受けて成った」とする説は、次の内部徴証からして成立しがたいものである。

(1)勝本式の第二、三類アクセントは導ラ●○▽であるが、長峰東触における増加が目立つのは、比較的若い世代での○●▽である。(2)長峰東触の老年層のアクセントは勝本式で壱岐主流式ではない。壱岐主流式のアクセントが北上して、次第に分布領域を広げているのではあるまいか。以上のように解釈する。

続いて、壱岐における異体系のアクセントの衝突例として、いま一つの事例をあげておきたいと思う。壱岐の若年層にあらわれてきた、「当該地方生え抜きの本来とるべきアクセントとは異なった新たな発音の傾向」について報告する。郷ノ浦町麦谷触の塚本美佐江氏（19歳）によれば、その二拍名詞のアクセント(4)は、

表6　塚本美佐江（19歳　郷ノ浦町麦谷触）

語類 / 音節型	第一類	第二類	第三類
●○▷	煙	門下妻弦梨皆人重	牙霜
○●▷	牛釘口首杉滝爪鼻	蟹皆紙北癖夏昼冬町 胸村雪技	足網家池犬色馬農親 鍵髪草米舌月蚤腹耳 山夢
○●▶	飴蟻梅枝蔓岡顔柿風 蟹金壁傷呂桐霧国膝 先酒笹鯖皿皺鈴裾底 袖鷹竹棚蜃壷釣虎鳥 面庭軒箱蟾蜂膝暇紐 笛蓋筆星右水道虫森	疲鯵石岩垣型殻川杭 串鞍筇鹿蟬旅塚次蔦 虹橋族機肘人	竿腕鬼岸肝茎梛倉栗 苔亭竿坂塩潮島鮨炭 墨谷土綱時毒年波縄 練墓恥鉢花浜房節核 闇指弓脇梓綿

一・二・三類	四・五類
○●▼	●○▽

に行われており、第一、二、三の各類に共通した平板型化○●▽↓○●▼の傾向が著しい。同様の現象は、戸辺町深江南触の豊増敏氏（21歳）のアクセントにも見出され、若年層全般に深く浸透してきている。壱岐への流入が考えられる「平板型○●▼をもった優勢な体系」としては、テレビ・ラジオを介した東京共通語アクセントの存在がある。東京共通語の二拍名詞アクセントは

一類	二・三類	四・五類
○●▼	○●▽	●○▽

ゆえ、第一類での最も著しい○●▽↓○●▼傾向は、その○●▼を個別的直接的に習得したもの、第二、三類にもある○●▼の増加は、第一類において著しいところの、平板型化の傾向「○●▽↓○●▼」へ類推した結果ではないだ

ろうか。これもまた、異なる体系のアクセントが衝突してもたらされたアクセント変化の一現象だと考えたい。同様の平板型化傾向は、同じく筑前式アクセントの体系を有する福岡市西部域およびその近郊、[5]豊前式アクセントの北九州市などの若年層にも広く認められ、壱岐をも含む三地点共通の現象で都市部に限らぬ点重要である。

注

(1) 壱岐アクセントについては次の四氏の報告がある。平山輝男氏『九州方言音調の研究』（明治書院 昭和26年）、金田一春彦氏「対馬附壱岐のアクセントの地位―九州諸方言のアクセントの対立はどうしてできたか―」（『対馬の自然と文化』（岩波書店 昭和37年）、奥村三雄氏「九州諸方言アクセントの系譜」（九州文化史研究所紀要23）、岡野信子氏「壱岐対馬の方言」（『講座方言学9』（国書刊行会 昭和57年））など。

(2) ●、○は高音、低音拍を示し、▽、▽は助詞「が」の高音、低音拍である。

(3) 福岡市中心部などでの、

	三類	一・二類	四・五類
広	○	●	▽
狭	●	○	▽

の体系ともつとみられる「博多式」と区別して、このように呼称する。

(4) 第四、五類は、壱岐の各地とも●○▽が大勢で変らぬゆえ、省略に従う。

(5) 稲川順一氏「筑前のアクセント」（語文研究 39号）、「福岡県諸方言アクセント」（語文研究 44・45号）参照。

(6) 岡野信子氏「福岡県の方言」（『講座方言学9』（国書刊行会 昭和57年））参照。

―山口大学人文学部助教授―

寸懐（Ⅰ）

ロバート・キャンベル

雑誌編集者の心労は千差万別、なかでも締め切り寸前の最終修正・校正は最も勇断を要するであろう。と言っても書く側の心配も決して少なくない。千慮の一失、つまらない字句の続きぐあいや誤字・誤用のために、たとえば学者なら学者は思いがけない難儀を掛けられかねない。近世からそのまま引継いだ問題のようである。例として、文政年間から流行した学者批評書には、常套手段として微細な文体分析を行い、指示語の不明さや「剰語」・「贅語」等を論難することによって、対象の有名学者・文人の揚げ足を取る仕組になった多くのものがある。「妙妙奇談」ものの作者のなかでも、一人、「頑愚驚驍（アバケモノ）」（「芸林可会録」）と生前からの不評をかえりみず、当時の文人墨客の不学を冷笑して、しかも同じ「妙々奇談」系統のものでは自分の過を容赦なくとがめられる畑時倚（毛義、後平亭銀鶏、文盲山人、燕石楼主人などと号す）が居た。天保六年三月刊の自作「銀鶏一睡 南柯迺夢」は、書画会など文人の催し物に出没する俗輩を、たとえば「去年もさる詩人の元より筆を贈りしに、上書に『津二対とかきてありしを、一人の気いたふり大に笑ひていへるは、何等の取込ありて認しや、『筆といふ字に竹冠なしとて咎めし人あり』と、「化ケ物会所」の大将に託して痛罵させ、地上の気風を嘆かせる趣向である。これに対して、天保九年一月刊「諸家必読出放題」（右「芸林可会録」の作者秋田藩〈49頁〈続く〉